極小未熟児の親子面会時における行動
——とくに父親の行動および情動的変化——

竹内　　徹（大阪府立母子保健総合医療センター周産期第2部）
藤村　正哲，横尾　京子（大阪府立母子保健総合医療センター周産期第2部）
糸魚川直祐（大阪大学人間科学部）

目　的

われわれは，未熟児の母子相互作用に関する研究過程で，父親の果たす役割を無視できないことに注目して，前年度にひきつづき各対面場面における父親の行動および情動的変化を調べ，父親の保育への関わりを検討した。

対象および研究方法

当センターNICUに入院した低出生体重児の両親を対象にして次の2点を検討した。(1)急性期病棟(NICU)および回復期・成長期病棟に，VTRカメラを設置し，昭和57年8月より58年11月まで，患児の臨床経過に応じた面会場面における両親の行動を記録した。(2)昭和58年3月より59年2月末まで入退院した極小未熟児96名中，院外出生，転院，死亡，手術適応，多胎児，母子家庭を除く42名の両親に対してアンケート調査を実施。両親に対し，それぞれ同一項目につき選択・自由記載法により児の退院後2週以内に実施した。対象児の出生体重は，1165±205g，在胎週数26.7±4.1週，人工換気療法実施日数2.9±17.5日，保育器使用日数36.3±17.5日であった。なお今回は,(1)および(2)の対象をそれぞれ照合して個別検討を行なわなかったが，一部極小未熟児例で重複する対象があった。

研究結果

(1)表1はVTRカメラにより記録された初回対面時の父親の行動分析の結果およびその各新生児の特徴を示したものである。対象新生児は，極小未熟児の父親11名（うち超未熟児5名）および2000g未満の未熟児の父親4名，計15名である。父親の初回対面時の患児の日齢は，出生当日または翌日で，患児は全員保育器内で保育されていた。対面時間の長さは，保育器付近に父親がいた時間をあらわす。対面時間は平均10分30秒であるが，10分以内のものが半数以上あり，個人差が大きい。タッチング（以下接触）は，15名中9名が行なわず，6名が行なった。対面時間に対する接触時間は，15.2％であり，手掌によるよりは，指先で軽くたたく，なでるなどの接触方法であった。接触部位は主として四肢を選ぶ傾向が著しかった。その他凝視時間は圧倒的に長く，対面時間に対する平均％は，83.0％であった。また父親の表情は乏しく，微笑などの表情の出現は，11名にみられたが頻度は少なく平均6.0％であった。微笑の出現は，主として医師・看護婦からの話しかけや笑いによって触発され，児との関わりで表出したのは，42回の微笑表出中3回であった。顔をしかめるなどの不快表情を示したもの2名であった。

父親の子に対する関わりを継時的にみると，NICUから回復期・成長期病棟に移動するようになると，微笑が増加し接触の仕方も指だけでなく手掌を用い，体全体へと接触の広がりが認められた。器外保育可能になると子を抱いたり，en-faceの位置をとり，あやす行動の表出が増すことが認められた。

(2)両親の面会パターンを上記期間調査したが，入院児1名あたりの入室者数（月別），曜日別平均入室者数ともに，両親に同じパターンが認められた。しかし父親数は母親数の約半数であった。また1日の時間帯をみると，父親の面会時間には明らかに2峰性が認められ，午後2時と6時にピークが認められた。

今回のアンケート調査対象は院内出生に限ったため，事実上の初回対面は分娩室か手術室で行なわれ，生後2時間以内であり，父親93.3％母親90％であった。また初めてNICUへ入室した時期は，父親の90％が出生当日か翌日，母親は生後3日以内に86.7％が入室面会していた。初回対面時の気持は，両親の間に差はなく，「小さくてかわいそう」(両親で63.4％)，「うれしい・安心」(25％）であった。また対面時の児の印象部

分は，両親とも顔と手足と答えたもの約30%，両親間の相違は，ペニスと答えたもの父親16.7%，母親0%であった。

初回行動（対面・接触・抱擁・授乳）における心理的・情動的変化については，図1に示した。各場面での初回行動の時期に，消極的（成長への不安，すまなさ）および積極的（かわいさ，顔としての実感，育児への意欲，常に一緒にいたい）気持の変化をみた。「すまなさ」は，圧倒的に各時期を通じて母親に強く，「成長への不安」は，両親に差はなく次第に減少していく。「かわいさ」は，両親とも初回対面時より強く，次第に上昇，「常に一緒にいたい」と「親としての実感」は母親と父親では，強いと答えたものに明らかな差がみられた。「育児への意欲」は，母親が抱擁，父親が授乳を経験した時，強いと回答したものが多かった。

表2は，父親の役割について自由記載法によって得た結果である。母児入院期間には，母児に面会し，子どもとのスキンシップを持ち，母親の精神的支えとなったと回答している。母退院後は，同じく子どもへの関わりに関することで，児の退院後はほぼすべて育児に関連するものであった。

結　語

1. 初期接触の段階では，父親は児に対し一定距離を保ち，保育器内の子に対する関わりは乏しく，表情等より不安・緊張感が推測された。しかしその後の対面を通し，子に対する積極的保育行動が発現する。

2. 心理的回復過程においても，父親と母親では積極的・消極的感情の表出程度が異なり，父親において弱い。

3. しかし父親の果たす役割から子に対する関心の強さを推測できた。極小未熟児の父子関係発達の評価には，父親自身の役割認識の明確さが重要であることがわかった。

文献

1）横尾京子・宇藤裕子・佐藤文子：極小未熟児の親子関係―入院中における両親の心理的・情動的変化．第25回日本母性衛生学会発表(於東京)，昭和59年．

2）中道正之・根ケ山光一・糸魚川直祐・鎌田次郎：未熟児と親の行動．その3．集中看護・特別治療室における父親の行動．第48回日本心理学会（於大阪）抄録，昭和59年．

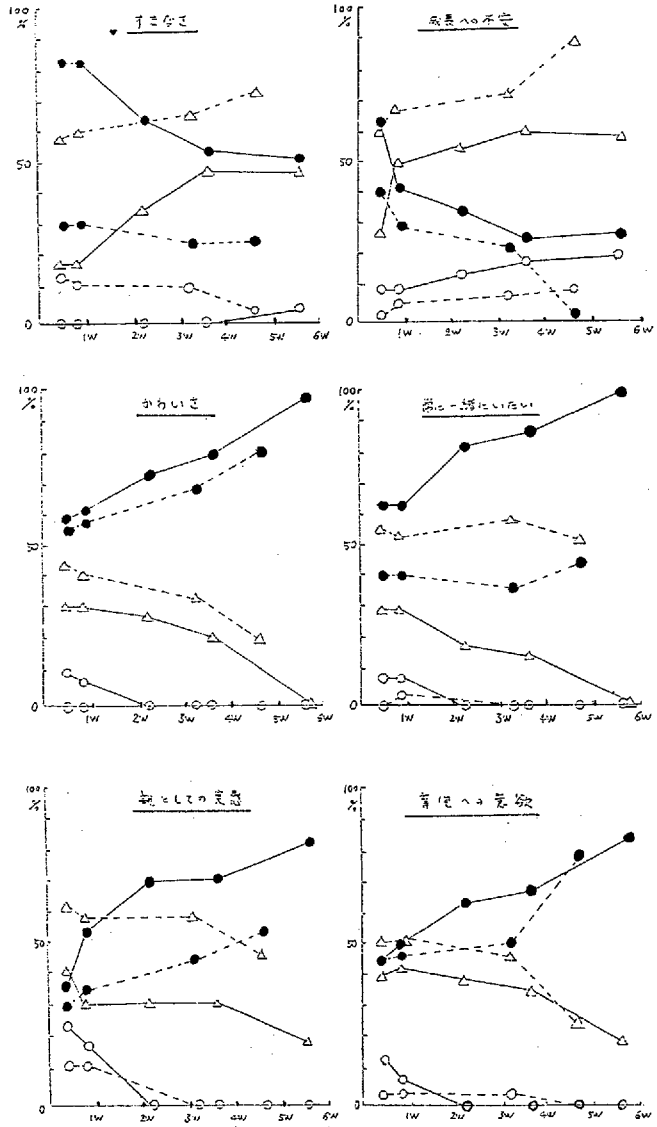
表1　父親の行動（初回対面時）

対象新生児					初回対面時の父親の子に対する行動					
氏名	性	出生体重	在胎週数	出生順位	患児日齢	面会時間	接触(%)	見つめる(%)	微笑する	顔をしかめる
OhN	男	760	26	1	1	15′ 33″	8.3	51.6	+	−
MoN	女	780	25	2	0	11′ 20″	0	51.1	+	−
TaK	女	800	30	3	0	10′ 20″	7.3	80.5	−	+
SeM	女	850	27	3	0	3′ 30″	0	100.0	+	−
MoM	女	970	31	1	1	5′ 00″	50.0	80.0	+	−
TyY	女	1052	27	3	0	8′ 15″	9.1	100.0	+	−
TmY	男	1100	28	2	0	6′ 15″	0	72.0	−	−
SuT	男	1130	27	1	0	7′ 00″	0	100.0	−	−
NiH	男	1156	30	1	0	12′ 20″	22.4	100.0	+	−
YaS	男	1274	29	2	0	1′ 30″	0	50.0	−	−
NaK	男	1416	34	1	0	38′ 30″	0	94.8	+	−
UeO	男	1650	32	3	0	16′ 30″	0	59.4	+	−
NaK	男	1664	31	2	1	7′ 23″	0	100.0	+	+
OhA	女	1774	34	?	1	8′ 15″	0	88.2	+	−
DeC	男	1900	33	1	0	28′ 20″	8.1	95.5	+	−

＋：観察された場合，－：同行動が認められなかった場合。

表2　父親の果たした役割（実数）

	母入院中		母退院後		児退院後	
	父	母	父	母	父	母
母親の不安の軽減	19	2				
面　会	10	20	7	8		
母親を面会に連れて行く			9	9		
子どもとのスキンシップ	3	1	3	3	2	4
子どもの成長を見守る	1		1			
母乳の運搬			5	5		
情報の伝達	1	1	2	1		
書類上の手続き	1	1				
上の子どもの世話	1	3	1	1		1
家　事	4	2	2	1		
相談相手になる				2	5	2
育事全般					7	9
授　乳					3	2
沐　浴					3	3
環境の整備					10	9



各図とも，左より初回対面，接触，抱擁，授乳，哺乳
●強　△中　○弱　……父親　——母親

図1　初回行動時の各種気持の変化
（極小未熟児の両親）

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

目的

われわれは,未熟児の母子相互作用に関する研究過程で,父親の果たす役割を無視できないことに注目して,前年度にひきつづき各対面場面における父親の行動および情動的変化を調べ,父親の保育への関わりを検討した。